

---

# **矢代和樹の多忙なる生活～《花より団子より》編（中）～**

イヌズキノネコ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

矢代和樹の多忙なる生活（『花より団子』より）　　『編（中）』

### 【Zコード】

Z8211D

### 【作者名】

イヌズキノネコ

### 【あらすじ】

3部構成でお送りするストーリーの中編。前回の続きに当たります。和樹が“KY”と呼ばれるようになった理由……それを彼の回想と共にお伝えします。

## (前書き)

### 【前回のあらすじ】

和樹、キヨミ、カリンちゃんは昼休みに談笑していた。その会話中に、カリンちゃんが和樹の事を『KY君』と呼ぶ。和樹は“KY”と呼ばれた事により、数日前の出来事を回想するのだつた。

数日前、和樹は『笑つて健康になる体操』を行つていた。そこに風紀委員の『天ヶ崎ティアラ』が現れて、捕まる事に……。尋問の結果、ティアラは勝手な解釈で和樹を許す。そして2人は、今体育館へと向かっていた。

生徒の波をかき分けて、渡り廊下を突つ切つて、その先に建つ体育馆へと進んでいく。今朝一度訪れた場所であるが、今日にしているそこは、あの時の静かな雰囲気とはまた違った雰囲気を漂わせていた。

体育馆の入口は、生徒の出入りに支障が出ないように開け放たれている。そのため、俺たちが入るのにも時間はかからなかつた。

俺の腕を引っ張るティアラ先輩は、無言のまま体育馆の中をズカズカと進んでいく。体育馆の中央には集まつた生徒たちが列を作り始めていたので、俺と先輩は体育馆の壁と一年生の列との間に空いたスペースへと進路を変更した。

「あれ？ 和樹君？」

体育馆の隅を通つている途中で、俺を呼ぶ誰かの声がした。聞き間違いかと思いながら、声のする方へ目を向ける。そこには、キヨトンとした表情で俺を見ているカリンちゃんの姿があつた。

「和樹くん、おはよー」

「お、おはよう、カリンちゃん」

「今朝はどうにいつてたの？ 先にいるつて聞いてたから、ずっと待つてたんだけど……」

そう言えば、カリンちゃんは俺がどんな事態に陥つてているのか知らないんだつた。

俺はティアラ先輩の引っ張る力に抗つて、少し歩く速度を落とした。

「「」「」めん。ちょっと用事が出来て……」

「やうなんだあー。なら、連絡くらいして欲しいよ。キヨリちゃん」と2人、和樹君の事を心配してたんだから

頬を膨らませて少し怒ったような顔をするカリンちゃん。怒っているのに……かわいい　俺、カリンちゃんになら何度も怒られてもいいかも……なんて、変な気持ちを持ちそうになつた。

「カリンちゃん、誰と話してるの？」

「あ、キヨリちゃん。ほり、あそ！」

「ん？…………あ！　あああ…………！」

カリンちゃんの隣で大声を上げる女の子。猫毛のサラサラした髪を揺らして、こっちに人差し指を突き出している女の子。俺が今の状況に至る原因を作った張本人　『春木　代美』がそこにいた。

「ガズキ、あんたど「」にいつてたの！　心配してたんだからね！」

「「」「」めん…………じゃなくて、全ておまえのせいなんだよ……」

「ほえ？」

俺が何を言つているのかわかつていらない様子のキヨリ。仕方ない、ちゃんと説明してやるか。

「あのな 」

「ちょっと、矢代君。早く行くわよー。」

「 うわあ！」

ティアラ先輩が俺の腕をグイッと引っ張る。俺はよろけながらも、何とか倒れまいと踏みとどまつた。

「せ、せんぱい！？」

「何モタモタしてるの？」

「えつ、あ、ちょ、ちょっと……」

「もう、グズグズしているのは男らしくないわよ！ さあ、早く行きましょ 」

強情な先輩は、俺の言葉を聞き入れてはくれなかつた。

「ねえ、キヨミちゃん。和樹君の横にいる人つて……天ヶ崎先輩、かな？」

「天ヶ崎？」

「ほら、入学式の時、会長さんが『気をつけた方がいい』って言つていた 」

「あ、ああ～思い出した！ “ピーヒヤラ” っていう2年生よね？」

「違うよ～。某マンガの主題歌『揺れるポンポロリン』に出てくる  
ような名前じゃないよ！ あの人は、天ヶ崎“ティアラ”！」

「そりだつたね。で、なんでそんな人とカズキが一緒なの？」

「さあ……」

後ろから微かに聞こえてくる2人の会話。それに耳を傾けながら、  
俺はティアラ先輩に抵抗していた。

「矢代君、抵抗しないの！ 矢代君のためにやるんだから、あなた  
がそんなんじやダメでしょ？」

「す、すみません。で、でも」

「まさか怖気づいたの？ そんな事じゃ、この先の試練を乗り越え  
られないわよ！」

この後に起こる事は、試練とも言える危ない事なのか……と、少  
しだけ気持ちが下を向いた。

「さあ、行くわよ！」

腕を強引に引っ張る先輩は、女の子とは思えないほどの強い力で  
俺の抗う力を退けた。

「ちょっと、カズキイー！ 聞きたい事が……」

「……、「めん！ 詳しい事は後で話す！」

俺は進む方向とは反対に顔を向けて、キヨミとカリソンちゃんに言った。  
伝**つ**けを残した。

体育館の垂れ幕付近。周りでは生徒たちが各学年、各クラスに分かれて列を作っている。

その並びの一番左端 進行用に使われるマイクが設置されて、放送部の女の子と先生方が待機している場所 に俺と先輩はいた。

「先輩、今から何をするんですか？」

真っ直ぐ前を向いている先輩に、俺は問いかけた。だが、先輩がこっちを振り返る事はなく、また返事が返ってくる事もなかつた。ひたすら前進する先輩の背中を追つて、チヨコチヨコといついていく俺。まるで先輩の付き人みたいな感じだ。右側にいる一年生の列からは、クラスメイトの俺を見つめる視線がちらほらと。反対の左側からは、先輩の姿を見て顔を引きつらせる先生方の不安げな視線がちらほらと……。

一通りの眼差しが交錯する道を歩き進めていると、突然前を行く先輩の足が止まった。

「あら？ ティアラじゃない。こんな所に何の用？」

先生たちが並んでいる体育館の端で、先生たちよりも偉そうな態度で腕組みをしている女の子がいる。前髪を中央で分けて、清純な雰囲気を醸し出している女の子は、俺の前にいるティアラ先輩を見つめていた。

「今日はみんなに“どうしても”報告したい事があるのよ。それで少しだけ話をする時間を頂きたいと思つて、玲奈に相談に来たんだけど……どうにかならないかしら？」

「ふう～ん……わうねえ～。あまり長い時間は取れないけど、少しだけなら何とかなるわよ。私用に設けられた時間があるから、それがあなたに少しだけあげる」

「ありがとう、玲奈」

「どういたしまして　と言つても、別に礼を言われる事じゃないわ」

「あら、奇遇ね。わたしもあなたに礼を言つつもりなんて本当は無かつたから」

「そうなの？　なら、言わないでほしいわ。あなたに『ありがとう』なんて言わされたから、少し鳥肌が立つちゃったわ」

和やかな会話？

「フフフフ……」

「オホホホ……」

表面上は笑顔でやり取りをする2人　なのに、どうして刺々しい印象を受けるのだろう。おそらく田に見えない胸の内では、すごい事が起きているに違いない。

2人の危ない雰囲気を感じ取った俺は苦笑いを浮かべて、その場から離れるように身体も気持ちも一步分後退させた。

俺が怯えている間に、体育館には全生徒が集合していた。準備が整った事を確認した先生は放送部の女の子に指示を出し、全校集会の開会宣言を速やかに実行させた。

「では最初に、生徒会長の『吹雪 玲奈』さんから挨拶があります

マイクを伝つて響く声に、ティアラ先輩と向き合つていた女子生徒がピクッと反応した。

俺の目の前にいる清純そうな女の子。この人が、この学園の生徒会長『吹雪 玲奈』先輩である。

玲奈先輩はアナウンスを受けて、壇上へ向つて足を踏み出した。

「それじゃあ、ティアラ。また後で」

「ええ、また後で」

微笑み合う2人。その間で、火花が散つているような気がした。

壇上へ登つた玲奈先輩は、全校生徒を前にしても気丈な態度を貫いている。さすが生徒会長といったところか。背筋の伸びた姿勢は何とも優雅で、生徒を見つめる瞳は輝きと優しさに包まれていた。

「皆さん、おはよついざります。生徒会長の吹雪 玲奈です」

玲奈先輩の澄んだ声が、静かな場内にスッと染み込んでいく。朝の爽やかな時間帯に新鮮な風が舞いこんだよう。

「新学期が始まって数日が経ちました。新入生の皆さん、学園の生活には慣れましたか？ 2年生3年生の皆さん、人生の先輩として誇れる生活を送っていますか？ 休み明けでまだ生活のリズムが作れていない方は、散りゆく桜のように流れに身を任せのではなく、花びらを身に纏うそよ風のよう」、自分で流れを作るんだといふ気持ちを持つて下さい」

優しく喝を入れる生徒会長に、生徒たちは真剣な顔つきで返答した。

「さて、本日は特に連絡事項もないのに、私の話はここで終わりにしたいと思います……が、その前に。

実は先程、ある生徒さんから“皆さんとビデオしても話がしたい”という要望がありました。皆さんの貴重な時間をその方に差し上げていいものか……と少し考えましたが、熱意ある姿に心打たれてお話し願おうと思つます」

玲奈先輩がこっちに目を向ける。隣にいるティアラ先輩は顔を引き締めて、舞台へ上がる準備を整えていた。

「 風紀委員のティアラさん、ビデオ」

優しく囁かれる、麗しき美声。導かれるように、ティアラ先輩は力強く一步を踏み出した。

「矢代君、行くわよ！」

「は、はい！」

俺も先輩に続いて壇上へと歩き始めた。

全校生徒の顔が一望できる場所。俺は今そこに立っている。大勢の前に立つなんてそういう経験できる事ではないから、今俺は心臓バクバクの超緊張状態。そして、注がれる視線は“あいつ、誰？”って感じのモノ。そりやあ、入学してまだ4日しか経っていない俺の事を知っている人なんて、クラスメイト以外ではないだろう。何とも落ち着かない雰囲気に、俺は気を休める事が出来ないでいた。

一方ティアラ先輩は、壇上に上がるなり直ぐに中央の机に向かい、取り付けられたマイクを握つて話をする姿勢をとっていた。少し騒がしくなった場内にも怖ける様子なく、なんとも堂々とした姿である。

「みんな、おはよう！」

第一声を放ったティアラ先輩。その言葉に耳を傾ける生徒はほとんどなく、辺りからひそひそと話し声が聞こえてくる。視界には、やや引き気味の生徒の表情。先程先生たちも同じ表情していた事を考えると、どうやら先輩はみんなから距離を置かれた存在らしい。触らぬ神に触れてしまい同行する破目となつた俺には、同情の眼差しが少なからず向けられていた。

「今からする話は、とても重要なことです。みんな、集中して聞いてちょうだい」

ついに真相が明かされる。“なぜ俺がここに立たされているのか？”それが解るという事で、俺はいつも以上に集中していた。

「最近、この体育館で不思議な事が起きているのは、みんな知ってるでしょ？　そう、学園の怪談に新たに加わった『朝から奇声のする体育館』って話のこと」

騒がしかつた場内に静けさが戻つてくる。学園の怪談になるくらい広まつていた話とあって、みんなの関心が集まつたようだ。

「わたしはその真相を探るべく、今朝単独調査に踏み切りました」

ちよつと淋しい事を言いますが、先輩はみんなから謙遜されてますよね？

なら、常に行動は“単独”のよつな……。

あまりに注意深く聞いていたために、妙な所に気を取られてしまつた。そんな俺をよそに、先輩の話はどんどん進んでいった。

「朝の清々しい時間帯。静寂に包まれている学校。今日に限つて笑う声を聞くことはできませんでした……。

しかし、そこで断念するわたしではありません！　“もしかすると……”と思つて、体育館に向かいました。そして体育館に踏み込んだ私は、真実をこの田で田撃しました

突然騒ぎ立てる生徒たち。「早く続きを聞かせろーーー」と声を上げている。

「みんな、慌てないで。ちゃんと話すから」

聞き分けの良い生徒ばかりなのか、一瞬にして元の静かな場所に戻っていく。

「それじゃあ、言つわね。わたしが体育館で見たモノは……」

「ゴクンと喉を鳴らす音が聞こえてくる。

「誰もいなはずのこの場所に、一人寂しく佇む少年でした」

先輩の声がこだまする。それだけ、周りがシーンとしていた。

「わたしは彼を捕まえて問いただしました。そして、彼の口から聞きました。『笑い声を上げていたのは、俺です』と……」

ひんやりとした空気の中を、言葉だけが流れていく。そして、山彦のように熱のこもった声が返ってきた。

「それは誰なんだよ！」  
「お化けじゃなかつたの！？」  
「ちょっと気持ちわる~い！..」  
「もしかして、うちの生徒？」  
「そいつ頭おかしいんじゃねえ！？」

誰に向かっているのかわからない罵声は、的確に俺の心を打ちのめしていく。

「みんな正体が知りたいみたいね？　いいわ、教えてあげる。その

少年とは……みんなの田の前にいる 「

先輩が俺の方に手のひらを向ける。微笑みを浮かべている先輩は、嬉しそうに言った。

「矢代 和樹君です」

俺の名前を公表した先輩。まるで有名な偉人を見ているかのように瞳が輝いている。

だが、ティアラ先輩以外の人たちは冷たい視線を送っていた。まるで異人を見たかのように顔が引きつっている。

先輩、俺のためにやっているんですよね？

俺にとって“良い事”をやっているつもりなんですよね？

でも、これって良い事？

ただ“晒し者”にされているだけのよつな……。

公開処刑されている気分なんですけど……もしかして、みんなの前で罪を償えど？

突き刺さるような無数の視線に、俺は立っているのがやっとだった。

場内を飛び交う酷い言葉。悪口を言われている方がまだマシなくらいだ。そんな現状に何を思ったのか、ティアラ先輩は声を荒げて怒りを露わにした。

「みんな、うるさあ　い！」

強い感情のこもった言葉は、みんなの行動を停止させた。

「和樹君が“なぜ笑っていたのか？”その理由も知らずに、悪者扱

いするなんてどうこいつ」と?「

先輩。患者じゃなくて腫れ者ですよ。  
あと、先輩のせいでこうなりました。

「理由を聞いたら、きっと考えを改めるわ。いい? ちゃんと聞  
きなさいよ!」

矢代君はね……矢代君はね、なんとあの偉大なるアーニ 浜口大先  
生が考案した『笑つて健康になる体操』を行っていたのよ!」

……。

無音となる体育館内。力チンと固まってしまった生徒たち。  
冷たいレーザー砲の嵐から一変して、完全に場が凍りついている。

「ここは何かの被災地ですか?」

先輩……状況が悪化しています。

フォローしたつもりかもしれないが、全くフォローになってしま  
ません。

状況の変化を読めていない先輩は、さらに言葉を続けた。

「矢代君は素晴らしい人なのよ! だつて、アーニ 浜口大先生を神  
と称える人なんだから」

称えてません、称えてませんよ!」

「そして、矢代君はわたしに言ったわ。『俺は笑つて健康になる体  
操を広めます。だから、『笑つて健康になる体操部』を作ります』  
つて」

「言つてない！ 言つてない！」

「だから、みんな……笑つて健康になる体操部 部長《矢代 和樹》  
『君をどうぞよろしく！ 入部者募集中だから、興味を持った人は  
入つてあげてね』」

楽しそうに話す先輩とは真逆の反応を示す全校生徒。痛い人を見る  
ように、俺を完全に拒絶している。

俺はこの瞬間、人生の終わりを感じた……。

「はあ～。ちょっとだけあなたに感心してたんだけど、やつぱりテ  
ィアラはティアラね？」

今まで壇上の脇に身を潜めていた玲奈先輩が、ティアラ先輩の元  
に歩み寄る。

「それはどういう事かしら？」

「あら、わからない？ 風紀を乱す者を取り押さえた所までは良い  
けど、最終的に風紀を乱す手伝いをしているのよ？ 変な部活を設  
立しようなんて、ホント理解に苦しむわ」

「玲奈には理解できなくて当然よ。偉大な人間が為し得ようとする  
ことは、常に一般人には理解できない事なんだから」

「あなたと話していると、ホント頭が痛いわ。常識の範囲内で行動

してくれない？」

「それはできないわね。わたしと矢代君は“この世界を変える者”になるんだから」

「……そう」

玲奈先輩は呆れたように溜息をついて、ティアラ先輩（と、ついでに俺）を憐れむように切なげな瞳で見つめていた。

「そこにいる“彼”も、あなたと同種の人間なのね……」

ち、ちがいます！

玲奈先輩、俺は良識ある人間です！

「理解できない人たちと、これ以上会話するのは憂鬱だわ」

「仕方無いわよ。わたし達は人間の枠を超えて、超越者になるんだから」

既に常識の枠を大きく超えてますねえ、ある意味。  
先輩と違つて、俺は遠慮させてもらいますが……。

「話終わつたんだから、さつさと降りて」

「ええ、そうさせてもうつわ

「あ、それと……部活の申請はまだ出してないでしょ？」

「ん？」

「……いいわ。可哀想だから、私が許可出したとしてあげる」

「へえ～、たまには良い事するわね」

「お礼の言葉は要らないから、さっさと降りて」

変な空氣の中、俺とティアラ先輩は退場した。  
壇上を降りた後、クラスの列に戻る事など出来そうになかったので、俺は一足先に自分のクラスへ戻ることにした。

その後は、思い出すのも苦痛なほど悲惨な事態が待っていた。唯一キヨミとカリンちゃんだけが『笑って健康になる体操部』の設立に喜んでくれた。

【笑って健康になる体操部】……現在、部員数3名。部長《矢代和樹》、部員《春木 代美》《三田月 歌鈴》……以上。

「Jの出来事があつたせいで、俺はKYOと呼ばれるようになるには、ちょっと不十分かもしれない。というのも、実はこの話には続きがある。

大惨事の起った日の翌日。俺は“学校に行きたくない”と思いつつも、重い足を引きずりながら登校した。学校の門を潜ると、数名の生徒が声かけをしながらビラのようなものを配っていた。

「四ノ宮学園コースの新刊です！ ビラ、お受け取り下さい！」

通りゆく生徒に片っ端から声をかけて、抱えているプリントの束から器用に一枚だけを取り出して渡している。初めて見る光景に戸惑つたが、突っ立っていても仕方ないので登校する生徒に紛れて歩みを進めた。

「四ノ宮学園コースの新刊です……って、あ！？」

俺の顔を見るなり、驚いた表情を見せるビラ配りの少年。昨日あれだけの事を仕出かしたのだから、こいつの反応は当たり前かあ……。

怯えた表情を見せる少年は、震えながらも俺に新聞を渡してきた。

「ビラ、ビラ……」

「え？ あ、ああ……」

俺も受け取るか受け取るまいと躊躇したが、結局受け取ってしまった。

下駄箱に向かって歩く中で、手にした新聞に目を向ける。『スクープ！！ 四ノ富学園の怪談『笑い声のする体育館』の真相』というトピックスが、まず目に入った。

続きを読むと、そこには昨日の出来事を思い出す内容がビッシリと載せられていた。

『 早朝、体育館から笑い声が聞こえてくる。本来笑い声は人の心に心地よく響くモノだが、誰もいない学校から聞こえてくるとなると非常に不気味である。そんな奇妙な出来事に見舞われていた四ノ富学園。正直、登校するのが怖いと思っていた生徒もいただろう。しかし、昨日その真相が明らかになった。なんと、新入生であるKY君が起こしていた事だった（プライバシー保護のため実名は伏せてさせていただきます）。理由は 』

その後も長々と綴られている文章。最後はこういう文で締めくくられていた。

#### 『【KY君についての豆知識】

学年：1年A組 出席番号：35番  
生年月日：19xx年3月20日  
身長：172センチ 体重：57キロ  
所属：笑つて健康になる体操部（部長）  
一言：天ヶ崎さんと並ぶほど変人です。皆さん、注意しましょ

う』

……。

ええと……コレは何ですか？

最初に書かれていたプライバシーの保護は、どこに個人情報満載なんですか？なぜ？？

そして、最後の一言。アレは余計だろ――！

全校生徒に配布された新聞。

昨日の出来事と新聞部の計らいによつて、見事俺はＫＹと呼ばれるようになりました、とさ。

めでたし、めでたし……。

……。

まあ、そういうわけですよ。

今俺はこの学園における“時の人”になっちゃったわけですよ。はあ……死にたい……。

「ねえ、ＫＹは嫌なの？」

うん、嫌……。

ん？ いつたい誰の声？

ふと我に返つて、顔を上げる。そこには困った顔をしたカリンちゃんがいた。

ああ～やつはめば俺、今キヨリとカツンちゃんと話をしていたんだつた。

あまりこも長〜い回想をしていたために、現実を忘れてた。

「ねえ、ＫＹは嫌？」

再度問い合わせてくるカリンちゃん。

現実に戻ってきた俺は、真面目な顔で答えた。

「ゼッタイ嫌です！」

「そ、そりなんだ……。なら、しちゃうがない。いつも通り和樹君って呼ぶね」

「うそ、もうして下せー」

「はーー」

明るく笑みを見せるカリンちゃんに、少しつと救われた気がした。

「それよりもカズキ、もうそろそろ活動しないの？」

何か思つ出したよつにキヨリが尋ねてくる。

「活動つて？」

「ぶかつ 部活だよ

「あ～あ……」

「カズキが何もしないんじゃ、私たち動けないんだけど……」「

「確かにそうだよね。部長が率先しないと、僕たち動けないんだよ」

「でしょ～？ ねえ、何かしようよー。」

「何かつて言われても……」

ベンチに深く座りなおして、思考を巡らせる。

その時、俺の肩に誰かの手が触ってきた。

「それなら、良いアイディアがあるわよ！」

俺の後ろで声がする。

そつと振り向いてみると、自信満々な表情をしたティアラ先輩が立っていた。

「あ、ティちゃん！」

「あ、天ヶ崎先輩！？」

「ハルちゃん、ミカリン、ここにちは」

「ティアラ先輩、いつからそこにいたんですか？」

「ヤッシー、わたしは神出鬼没なのよ。あなた達が気配を察知できるには、あと20年くらいは必要よー。」

満面の笑みを浮かべるティアラ先輩。実はこの人、現在『笑って健康になる体操部』の一員となっている。入部にあたって色々な事

があつたんだけじ。……話すと長くなるので、また別の機会に。  
先輩は入部してすぐこ、キヨミ、カリソンちゃんと仲良しになつた。  
かくいう俺も“ヤッシー”とあだ名で呼ばれるくらいの仲になつて  
いるが……。

「神出鬼没！？ それって、カッコイイ

「ありがとう、ハルちゃん」

「あの～天ヶ崎先輩、良いアイディアって何ですか？」

「あ、そうだったわね」

先輩は「ホンと一回咳をついて、真面目な顔で口を開いた。

「あのね、みんなで花見をしたいと思つていろいろだけじ、どうかし  
いり～」

「花見ですか？」

「そうよ。ちよつ季節は春だし、部活の今後を考えて、親睦会とい  
うのも有りじゃないかなつて思つたの」

「花見……良いですね！」

「でしょ？」

「うさうさ、すげえ良い。ティーちゃん、最高！」

「ありがと」

花見かあ～、確かに良いかもしれない。

最近モグラのように真っ暗な生活を送っていたから、そういうイベントは大歓迎だ。

「ヤッシャーはどうづっ？」

「俺も賛成です」

「よ～し、決まりね。早速だけど、明日辺り……どうかしら？」

「明日つて、土曜日つ？」

「学校もお昼までだし、良いですよ」

「俺も大丈夫です」

「オッケー それじゃあ、明日のお昼に花見を決行で！ 場所は駅の近くにあるフレッシュシユパーク！」

「つようか～い」

「それと、各自でお弁当を準備してきてね？ 出来るなら、みんなで食べれるようパンクーラー仕様で！」

「は～い」

こうして俺たちは、初の部活動“花見”を行つ事となつた。

お弁当かあ……。俺料理作れないからなあ～。

母さんにでも頼むか。

久々の楽しいイベントに俺の心は弾んでいた。

(後書き)

前回から時間が空いてしまいました。本当にすみませんでした。

あと余談ですが、主人公『矢代 和樹』のイラストが完成しました。小説家になろう「秘密基地」のイラストコーナーにて展示しております。もし興味がありましたら、ご覧になつてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8211d/>

矢代和樹の多忙なる生活～《花より団子より》編（中）～  
2010年10月27日08時12分発行